

スループット会計の新展開と実践可能性

水島, 多美也

<https://hdl.handle.net/2324/6787397>

出版情報 : Kyushu University, 2022, 博士 (経済学), 課程博士

バージョン :

権利関係 : Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (3)

氏名	水島 多美也			
論文名	スループット会計の新展開と実践可能性			
論文調査委員	主査	九州大学	教授	丸田 起大
	副査	九州大学	教授	大石 桂一
	副査	九州大学	教授	小津 稚加子

論文審査の結果の要旨

スループット会計 (Throughput Accounting) は、1980年代に、ゴールドラット (E.Goldratt) により、制約理論 (Theory of Constraints: TOC) の中で提起された管理会計手法であり、ベストセラーとなった翻訳書『ザ・ゴール』 (2001年) によって広く一般に知られるようになった。わが国では、1997年頃から学術研究が現れたが、2001年頃をピークにして、その研究は長らく停滞していた。また、管理会計実践に関する先行する実態調査の結果から、スループット会計はわが国ではほとんど実践されていないと認識されてきた。

本論文は、スループット会計に関する研究の停滞、およびわが国におけるスループット会計実践の低迷という現状のもと、文献研究と事例研究により、ゴールドラット以降のスループット会計の新展開となる国内外の研究成果をレビューし直し、わが国におけるスループット会計の実践可能性について検証した研究である。

論文調査の結果、本論文には、主に以下のような貴重な学術的貢献が認められた。

第1に、研究の停滞の間に提唱されていたがわが国では着目されていなかった、ゴールドラット以降のスループット会計の新展開となる、**Three-Questions Accounting**や**Time-Based Costing**といったモデルについて、丁寧にレビューしている点である。本論文を契機に、わが国においても、スループット会計研究が再活性化することが期待できる。

第2に、わが国でも、売上高から純変動費のみを控除してスループットを算定したり、リードタイムをベースにした時間当りスループットという指標を活用するなど、スループット会計を実践しているとみなせる実務があることを、事例研究により主張している点である。スループット会計は実践されていないという定着した認識に対して、実践事例を提示して説得的に再考を迫っている。

第3に、付加価値管理会計の新たな展開として位置づけられているアメーバ経営へのスループット会計の融合は、先行研究で規範的には主張されていたが、スループット会計を融合させている事例の発見に成功している点である。本論文の事例研究が注目を集めることに疑いはない。

第4に、直接原価計算をベースにした付加価値管理会計手法である**MQ**会計を採用していることも、スループット会計の導入・実践の促進要因になるのではないかと、いうこれまで提起されたことのない新たな仮説を、事例研究を通じて探索的に提示した点である。

以上の調査結果から、本論文調査会は、水島多美也氏より提出された論文「スループット会計の新展開と実践可能性」を、博士 (経済学) の学位を授与するに値するものと認める。